目次

はじめに　004

第1章——雨を見上げる女の子　006

第2章——ふたつの出会い　022

第3章——マリー・キュリーと放射能　038

第4章——女性科学者誕生　054

第5章——死の灰の分析　072

第6章——ウィーンの鐘の音　090

第7章——二酸化炭素と海　106

第8章——分析対決　118

第9章——親愛なるマリー・キュリー　132

＊さるはし新聞——150

＊偉大なるリケジョの先輩たち——152

＊猿橋勝子の生涯——154

＊勝子に会える場所——156

はじめに

マリー・キュリーを知っていますか？　ノーベル賞を受賞した初めての女性科学者であり、しかも一生のうちに二度、物理学賞と化学賞を受賞した、ただひとりの女性です。さらにその後、マリーのむすめもノーベル化学賞を受賞したので、ノーベル賞を受賞した唯一の母子でもあります。

マリーが亡くなったのは、この本の主人公・猿橋勝子が十四歳のときです。女性科学者がほとんどいなかった時代に、マリーの存在は学問を志す世界中の少女のあこがれで、勝子もその生き方に深く感動します。

勝子があこがれたのは、ノーベル賞を受賞したマリーというより、自分より姉を先にパリに送り出すマリーであり、自分の命もかえりみず戦争の前線へレントゲン車を運転

していくマリーであり、自然のひみつを解き明かすよろこびにみちびかれ、最後まで女学生のようなみずみずしい好奇心で研究を続けた、マリーの生き方でありました。

初め医者をめざしていた勝子は、ひょんなことから地球化学者として、中央気象台の気象研究所で働きはじめます。雨や海水、空気を分析して自然のしくみを探るのが勝子の研究で、わずかな量の成分を正しく測定する勝子の手腕は、やがて第五福竜丸の「死の灰」との出会いを引きよせることになります。

核兵器のおそろしさを知った勝子は、生涯をかけて、科学者の立場から核兵器のおよぼす害について声をあげ続けました。そして、自分のあとに続く若い女性科学者のために賞を作ります。それは今でも、「日本のマリー」たちの背中をそっとおしてはげまし続けているのです。

輝かしい名誉のためでなく、社会の役に立つために。

地位や評価のためでなく、自然の真理を探るよろこびのために。

一生を通じて勝子をねばり強く研究に向かわせたのは、このふたつのことがいつも胸にあったからです。ひたむきに生きた勝子の人生を、いっしょに旅してみましょう。

第1章——雨を見上げる女の子

窓を開けると、雨の音が大きくなりました。

しとしとと、こまかな水の音が重なり合う中に、耳をすますと、しずくのはねる音がまざります。大きく息をすいこんでみると、雨のにおいといっしょに、しめった土のにおい、草の青いにおいが体の中に入ってきました。

とうめいな雨の糸は、灰色の空の一面から次々とおりてきて、おわりがありません。

勝子は、雨の糸が空からおりてくる、その始まりが見たいと思って、空を見上げて目をこらしますが、あまりにも次々と降ってくるので、目が追いつきません。

こんなにたくさんの雨は、空のどこにしまってあるのかなあ。